分科会総括研究報告書

東京慈恵会医科大学産科婦人科学教室
蜂 屋 祥 一

本年度の研究目標

昨年度の調査研究によって明白となった問題点について重点的に，またその解答に時間を要するものは本年度は予備的調査研究として行った。

妊娠中毒症についてある程度の全国的な調査を要すること，各施設からの問題症例を集積して症例別の検討を行い，母児の危険を防止する具体的方策を研究することが本年および次年度の目標である。現実的には各種の制約から具体的方策は次年度，あるいはそれ以後の研究に委ねられた。

妊婦の糖尿病については，診断手段としての糖負荷試験の負荷量の変更が現実に進行中であるにも拘らず，妊婦について正常値限界値は日本人について決定されていないので，早急にこの作業を行い日本糖尿病学会と新しい勧告値について相談するのが本年度の主業務であった。その値は既に尿糖陽性であるもの，糖尿病の遺伝的素因を持つ者を含む全妊婦に対し妊娠糖尿病GDM（gestational diabetes）は75g負荷静脈血奨値（mg／dl）空腹時100，60分180，120分150，（180分145）のいづれか2つがこの値をこえるものとなった。この値の正当性について，また高脂血症について検討が行われた。

糖尿病を除く代謝異常症妊娠は昨年度最も危険と考えられたmaternal PKU とヒスチジン血症についてほゞその実態を知り，本年度は妊婦における代謝異常症の頻度と，特に頻度が高いと予想される内分泌疾患ことに甲状腺疾患についてスクリーニング方式の妥当性を含む調査研究が主として行われた。

妊娠中毒症

1. 概観と妊産婦死亡

分担研究者および研究協力者の施設を中心に全国31施設，19,299 例の分娩，軽症7.6％，重症1％，特殊型0.2％，特殊型45例の60％30例は常位胎盤早期剥離で子癇は13例であった。

これらの数字は過去と比較すると低下しており妊産婦管理が良好になって来たとも解釈出来るが，同時に母体死亡例は10例あり同じ調査年の全国平均の2.5倍を示した。このうち調査施設が管理していた妊婦からは1例のみで，基幹施設のため他の9例はいづれも転送されて来た症例であった。殆んどがＤＩＣを主とする出血によるものであって，極めて短時間のうちに発生し急速な処置を要する本症の管理は輸血の簡易急速化を含めて今後の改善の課題であろう。

2. 周産期死亡と低体重児

低体重児の発生は軽症では対照群と変らず重症では約5倍の発生率の増加をみる。特殊型でもこの傾向がみられ早剥などでも潜在的な同一原因が作用していることを示しているが，児の喪失についてはこの傾向は更に著明で重症は軽症の6倍，特殊型は15倍の危険度を持ち，早剥では現在でもなお40％の周産期死亡率を示している。このことは重症の際の管理，特殊型の発生の予防が最も緊急であり現在の妊婦管理についての主として財政的理由からの制約がより緩和されることが望まれる。

3. その他，および小括

産科婦人科学会中毒症問題委員会で妊娠中毒症についての成案を得るまで具体的な数値で表現することは出来ないが，旧分類で重症・特殊型の予防基準が問題である。これに関連し中毒症等妊婦の療養給付に関する法律の実効度について調査がなされ，全く実効をあげていないこと，その理由があまりに低く定められた所得制限にあることが明かとなったが，もし重症・特殊型の予防基準が明確化したときの事も考慮を要すると思われ

た。

また食事中の食塩の量は妊娠中毒症，特に重症・特殊型の発生に密接に関連するためその高血圧発生機序について研究が行われた。

妊婦の糖代謝異常

1. 妊娠糖尿病の限界値について

既に日本糖尿病学会と検討すべき具体値については記載したが，今回の調査はA群として尿糖を認めず糖尿病を疑うに足る素因を全く認めない妊婦を，B群としてそれらを持つ妊婦のそれぞれについて75g経口負荷を行った値から算出した。糖負荷試験は時間的，経済的に妊婦に負担の大きい検査でありその施行はどうしてもその疑いの大きい場合に行われ，今迄の値を到底正常値とはなし難い。

今回の負荷量変更の遠因となったO'Sullivanの研究はrandomにpick upされた妊婦に負荷試験を行い，或る値をこえた妊婦は将来overtなdiabetesを発症する確率が極めて高いという主旨であり，その際の児の予後について述べたものではない。Whiteの分類のclass Aはほゞこの規準に従ったときの児の予後が不良であることを示してはいるが両者は完全に同一ではないし対象とされた妊婦も米国内の一地域に限られているので，今回の値は試案とはいえ日本人妊婦の正常範囲を初めて明白にした実測値である。しかし調査を行った施設は基幹病院であり異常値妊婦を発見すると直ちに完全な管理が行われるので児の予後は極めて良好であって，A群，B群，GDM群に児の予後に関し差を認めず一部の妊婦の糖尿病について全く無知としかいえぬ医師の管理例と大差を示したが，この両者を同一の立場から比較することは不可能である。

2. その他の研究

上記の理由から他の研究によりこの核心に迫るため，Hb－A_1，高脂血症とリポ蛋白活性，エラスターゼの研究が行われたが，これらの成果は本年度に確実な結果を得て終了する性質のものでなく次年度に関連したものである。

妊娠糖尿病は通常の検査で発見されることなく全く無症候で，負荷試験で初めて診断されるのが現実ならば糖負荷試験を実施する基準を或る程度でも明確にしておく必要があると考えられる。次年度はそれを目標として努力すべきであろう。

また血糖値とエストロゲン，プロゲステロンの関係，妊娠各期の血糖値の変化についての研究が行われたほか，次年度の基礎として各種予備的な試みがなされた。

代謝性疾患

1. 昨年度からの研究の追加

フェニールケトン尿症母体については追跡中の個体および新しく婚姻により妊娠可能となったものに妊娠例はなく，妊娠前からフェニールアラニン値を低下させておく試みはその機会がなかった。

ヒスチジン血症母児の追跡から，妊娠中の母体血の上限と，児の血中値の上限を今迄より高い，ゆるい制限でよい事がますます明白となった。

2. 代謝性疾患の頻度と児の予後

糖尿病を除く代謝内分泌疾患を有する妊婦は全妊娠に対して0.5％以下と推定される。その97％は内分泌疾患で3％が代謝性疾患である。全体の90％を甲状腺疾患が占めその70％が機能亢進症であった。

代謝性疾患の25％はヒスチジン血症でありやはり相当の頻度に存在する。これらの母体からの児の約10％以上に何等かの異常が認められたが，その詳細は次年度以後の二次調査を必要とする。また代謝性疾患は種類が多いため殆んど2例以下であって如何に精細に調査してもある程度以上の成果をあげることはより長期の集計をまたねば不能であろう。

3. 妊婦および新生児の甲状腺疾患

上記のように最も頻度が高いと予想された甲状腺疾患について，妊婦血と新生児血についてスクリーニングテストが行われた。テストは抗甲状腺抗体，T_4値，マイクロゾームテスト，サイロイドテストから成り，精

密検査を要すると考えられた約3％について更にＴＳＨを含む各種検査が直接採血によって施行された。スクリーニング数は昭和56年11月末で母体血8350，新生児血3914である。

この結果未治療の機能亢進・低下のほか手術後の再発，急性炎症その他を含む異常例を児についても異常を発見し得たので，この方式の効果は確認されたと云える。

問題点としては妊娠に伴うサイロキシン結合蛋白の上昇のためＴ$_4$値は常に高値をとるため不要の精検が増加すること，マイクロゾームテスト，サイロイドテストによる抗甲状腺抗体の陽性率が高目に出ることである。

しかしスクリーニングとしての目的は充分に果しているので技術的な改良は今後の課題としてよいと思われる。

またマイクロゾームテスト(−)の母体から(+)の新生児が出生していること，同じ現象がサイロイドテストでも見られたことも今後の課題として残された。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

本年度の研究目標

昨年度の調査研究によって明白となった問題点について重点的に,またその解答に時間を要するものは本年度は予備的調査研究として行った。

妊娠中毒症についてある程度の全国的な調査を要すること,各施設からの問題症例を集積して症例別の検討を行い, 母児の危険を防止する具体的方策を研究することが本年および次年度の目標である。現実的には各種の制約から具体的方策は次年度,あるいはそれ以後の研究に委ねられた。

妊婦の糖尿病については,診断手段としての糖負荷試験の負荷量の変更が現実に進行中であるにも拘らず,妊婦について正常値限界値は日本人について決定されていないので,早急にこの作業を行い日本糖尿病学会と新しい勧告値について相談するのが本年度の主業務であった。その値は既に尿糖陽性であるもの,糖尿病の遺伝的素因を持つ者を含む全妊婦に対し妊娠糖尿病 GDM(gestational diabetes)は 75g 負荷静脈血奨値(mg/dl)空腹時 100,60 分 180,120 分 150,(180 分 145)のいづれか 2 つがこの値をこえるものとなった。この値の正当性について,また高脂血症について検討が行われた。

糖尿病を除く代謝異常症妊娠は昨年度最も危険と考えられたmaternal PKUとヒスチジン血症についてほゞその実態を知り,本年度は妊婦における代謝異常症の頻度と,特に頻度が高いと予想される内分泌疾患ことに甲状腺疾患についてスクリーニング方式の妥当性を含む調査研究が主として行われた。